

C-06-3

遷延性意識障害患者にツボ刺激を取り入れた腹部マッサージをおこなって ー排便への効果ー

自動車事故対策機構 千葉療護センター

○荒木菜穂子, 徳間則子, 中村泰子, 吉岡理紀, 石井明子, 吉沢純子

【目的】長期にわたる遷延性意識障害患者らは、低残渣の経管栄養食や薬剤による副作用、自律神経系の働きの低下により便秘に傾きがちであり、下剤の内服や浣腸などの排便処置によっても、なお排便コントロールが困難である。そこでツボ刺激を取り入れた腹部マッサージを1日1回定期的に実施し、排便への効果を検討した。【方法】対象は、当センターに入院している経管栄養中で、常時下剤を内服し、定期的に浣腸や坐薬を用いた排便処置を要する患者6名。平均年齢は45.7歳、平均受傷後年数は21年。研究期間は2005年8月～2006年1月。方法は1日1回3分ないし5分の腹部マッサージ（臍から三横指横、三横指下にある、大巨のツボをおさえて手掌軽擦・および橈盪揉捏）をスタッフ間の手技を統一させて6ヶ月間実施し、マッサージを取り入れる以前、3ヶ月のデータと比較検討した。終了後、スタッフに対し、手技の習得、効果を実感できたかに関してアンケート調査をおこなった。【結果】6例中、自然排便の増加3名、排便回数の減少3名、浣腸や坐薬を用いた排便処置の回数減少2名を確認できた。3分と5分の実施時間においては、結果に大きな差は見られなかった。【考察】遷延性意識障害患者の排便コントロールは困難だが、限られた症例においてはツボ刺激を取り入れた腹部マッサージにより、効果が得られた。手技が単純化しており、物品を要することなく、短時間におこなえることから日常のベッドサイドケアとして活用できると考えるが、ケアを習慣として定着させるには、時間と反復が必要であることがアンケート調査から読み取れた。